十六、佐須加利、或六本佐須加利、蓋夜佐須賀利之上略也、又聞、俄羅斯人爲局戯、枰上畫口乂、行馬夾食、略似皇國所爲牟佐之、呼曰射須加、然則佐須加利、蓋卽射須加、其戯傳于西域也、

〔伊呂波字類抄人事也〕八道行成ヤサスカリ

〔倭訓栞前編三十四也〕やさすかり　倭名抄に八道行成をよめり、やさすは八指の義、かりはかりうちの義、今のむさしの類にて、むさしもさすといへる也、八道行成は梵書に見えたり、

〔安齋隨筆前編十四〕一八道行成　和名抄雜藝具に、八道行成ノ讀、夜佐須賀利とあり、今も田舍にては、スカリと云、ヤサを略して云也、○略中ヤサスカリと云は、ヤススガリなるべし、ヤスは、ヤスジの略語にて、八ノ道スジを盤に畫なり、スガリは、子馬を以て親馬にスガリ迫る也、スガルと云は縋ノ字にて、繩を付て離れざるをスガルと云、是親馬を追て離れざる意にて、スガリと云也、

〔嬉遊笑覽四雜伎〕和訓栞云、○略中八道行成は梵經に出たり、其名義いまだ考得ざれ共、今も十六むさしを、十六サスカリといふを思へば、八を倍したるものとは知らる、伊勢氏ヤスジの說は疎忽なり、假字の違へるに心づかざる歟、さて八道行成のつくりざまは、今考るべからず、游學往來に、七雙六一二五雙六云々、十六目石など載するを見れば、雙六の類なる事明らかなり、

〔松屋筆記九十二〕六指、十六六指、指我利擲石、

さすがりは○略中八指驅の義なるべし、

〔下學集下藝態〕八道

〔運歩色葉集無〕六指

〔書言字考節用集八言辭〕八道遊戯、正曰八道行成、出梵網經、

〔玉勝間五〕むさしといふわざ

量べのしわざに、むさしといふ物あり、五雜組といふから書に、委巷兒戯有馬城、不論縱橫三子聯

むさし
十六むさし